



Social Designer

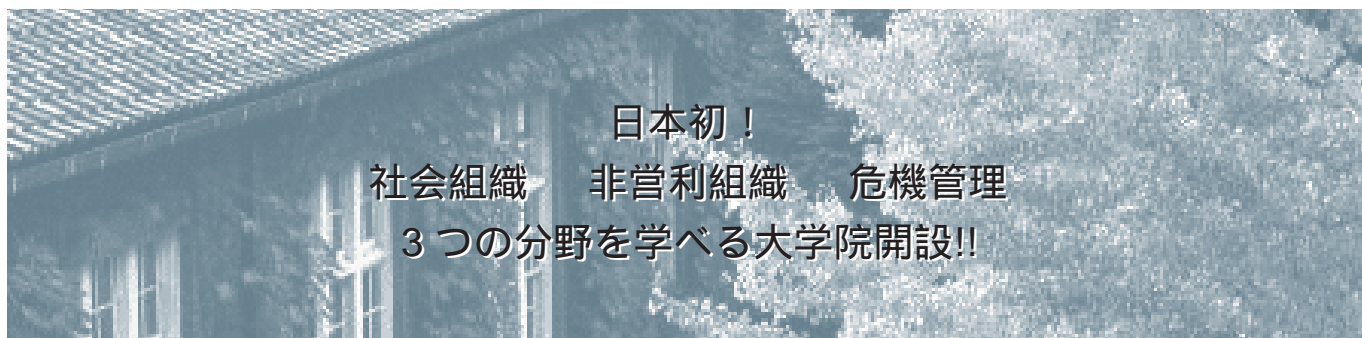
Contents

- P1 Interview 福原義春 株式会社資生堂名誉会長
- P2.3 新任教授紹介 / 院生情報 : ゼミ紹介
- P4.5 院生研究あれやこれや「座談会」
- P6.7 印象に残った授業&出来事 / モントリオールだより / 院生グループの活動
- P8 これからの研究科 / 研究科主催講演会報告 / 今後の研究科予定

Vol.2

発行：立教大学大学院
21世紀社会デザイン研究科
編集責任：笠原清志
編集：NPO法人21世紀社会デザインセンター
取材：院生
発行日：2004年1月31日

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1



interview

「書を捨てよ、いざフィールドへ」

私たちはそれぞれが、この時代・社会を、人間として、市民として、また、企業等で働く者として、どう生きていこうかと模索をしています。先生は、21世紀という時代は、どのような時代になるのか、そして、そこにおける企業の社会的役割はどのように変化していくとお考えでしょうか。

21世紀がどんな時代になるか、一概には言えませんが、工業社会を超えた社会、あるいは、脱工業化社会、情報化社会、高度知識社会であると言われて来ました。そこで何が起きるのか。20世紀は専門化に向かった時代でしたが、21世紀は統合化の時代です。ですから、そこで行われる判断は、これまでの、効率を重視する機械的な組織構造で行われるものから、一個の人間が行う主体的な判断へと変わらざるを得ません。「市民」あるいは「市民社会」ということばが意味しているのも、そういう、知識と判断力を備え、自分で自分の生き方を考えていくことができる人間と、そのような人間が作り出す社会なのではないでしょうか。

21世紀は、工業社会から、「人間の社会」へとパラダイム転換の世紀なので、前の時代に成功したことが、そのまま通用するわけがありません。私は、21世紀社会デザイン研究科のような社会人大学院の役割もそこにあると思っています。

企業についても、変化についていけない、進化に適應できない企業は、伸びることも残ることもできなくなるでしょうね。しかし一方で、企業の役割は、相対的には減っていくと考えています。20世紀は企業が中心で、営利企業は、組織の成員や家族の福祉までも面倒を見て来ました。これからは労働機会の提供という面そのもので、非営利セクターの役割が著しく拡大すると思います。そこで、NPO法人を統率する基本原則の確立と、限られた人間、資金、知識、時間等をどこにどう配分するかというNPOマネジメント技術の獲得が、重要な課題になってきているのです。

先生は、企業のトップとしてこの国のフィランソロピーをリードして来られました。欧米諸国との比較において、日本の企業が社会貢献活動を行うことについて、先生のお考えをお聞かせください。

様々な背景をもった人々が助け合って一つの国を作るといふ、フィランソロピーの思想そのものから出発したアメリカとは、社会の成り立ちが異なるのですから、わが国にはわが国のフィランソロピーが必要です。しかもそれは、江戸時代から、二宮尊徳の実践、懐徳堂の活動などいろいろな形でこの国に存在してきたのに、私たちは忘れてしまって、今、アメリカの真似ばかりしているのです。二宮尊徳は、地方政治に人々がどのように関わっていくかについての先駆的な業績を残し、懐徳堂の、商人の知恵をもって商人の生き方を考え、ひいては学問に勤しんだ姿は、「儲かりまっか」ばかりではない大阪商人の実像を伝えていきます。

実は、企業というのは決して金銭的な価値観だけで動いているのではないのですよ。経営者の信念もあれば、従業員の想いもあります。人間の経済行動の動機を利潤に限定したフリードマンやハイエクら新古典派の経済学に対して、「企業は収益だけを考えているのではない」という実業界からの反論がありました。私もその通りだと思います。人々は、お金の力には限界があることに気づき、別の価値を見出すようになってきているのです。CSR

**福原義春氏**

株式会社資生堂名誉会長、企業メセナ協議会会長、東京都写真美術館館長『企業は文化のパトロンとなり得るか』『会社人間、社会に生きる』『文化経済学』など著書・共著・論文多数。本研究科でコミュニティデザイン学演習(フィランソロピー論)を担当。

(企業の社会的責任) SR(社会的責任投資)などのことが聞かれるようになりましたが、社会に対してリスボンシビリティを常に考えている企業の方が、成長が速いということが現実に出て来ているのです。自社の利益だけを考えて行動する企業は、生活者に見放され、信頼が低下します。そして、学問の世界でも、「非経済学の経済学」、「利他の経済学」などと呼ばれるものが世界で一斉に出て来、経済学が、哲学や倫理学にぐっと近寄ってきていますね。

立 教大学の21世紀社会デザイン研究科は日本で初めてのNGO、NPO研究の社会人対応の大学院です。そこで、授業を担当された際の印象と、院生に一番伝えたいことは何でしょうか。

今世の中で、起きていることは何で、問題がここにあるということをお教えるところまでが、授業での私の仕事と思っています。問題解決の機会をたくさんちりばめてありますから、後は学生

自身が考えて欲しい。自分はどの問題にどう取り組むかをそれぞれが考えることが、問題解決の本当の意味ですからね。院生からの反応で私のそのような意図は伝わっていると感じています。

皆さんが一番望むのは、座って本を読んだり、考えたりしているばかりではなく、そのあと現場を歩き、現場の人の顔を見、話を聞くフィールドワークをやって欲しいということです。自分が関心を持ったフィールドへ出て行き、直接、自分の目で見、耳で聞く。フィールド調査による原始データを出発点に、そこから問題に関わり、自分の世界を広げて行く。

われわれは、初めて経験するモデルのない時代と社会にいるのですから、自分で体得しなければ分かるはずがないではありませんか。自分のフィールド体験から、時代が要請しているものが何であるかを掴み取り、それを提供していく、そんな生き方をしたいですね。

(聞き手 榊なほみ)

e n d

新任教授紹介

New

秋山 昌廣 教授



私は安全保障や国防問題について実務経験者の立場で研究を続け、論評や国内外のセミナー参加などにより、社会への情報発信活動をしている。近年、大学においても教育に携わるようになったが、これまでのところ法学部系統において伝統的手法により安全保障論や国際関係論を講義してきた。

立教大学大学院における教育はかなりユニークである。すなわち、21世紀社会デザイン研究科は、新世紀の新しい社会デザインとしてNPO・NGOといった非営利組織を研究対象として取り上げ、同時に、この社会の根幹にあるネットワークの機能を実践的に研究し、また、21世紀の社会が直面している様々なレベルの危機管理への対応を考察しようとしている。私の立場からすれば、これまで殆ど経験のない社会学の世界を意識して、新しい研究・教育活動をするようになる。率直に言って、きわめてチャレンジングな活動になると考えている。実は、伝統的手法での安全保障研究では二極分化が進み、この分野での論争はある意味でデッドロックに乗り上げていると観察する。

21世紀社会デザイン研究学科においても、伝統的安全保障論の学習は、各種危機に直面している社会をデザインするにあたっては必須の要素と考えるが、同時に、伝統的安全保障論の中における社会的、組織論的、ネットワーク論的考察が、新しい研究学問分野になる可能性を秘めていると予感する。

プロフィール

1964年東京大学法学部政治学科卒、大蔵省入省。98年防衛庁事務次官退官後、ハーバード大学客員研究員、学習院大学特別客員教授、立教大学大学院講師など務める。現在、シップアンドオーシャン財団会長、政策研究大学院大学客員教授、防衛研究所防衛戦略研究会議主査、日本国際フォーラム政策委員。

New

伊藤 道雄 教授(特任)



私は、過去25年間にわたり、市民による国際協力に取り組んできました。そしてこの活動を通して、国内外の社会の地殻変動が70年代頃から始まり、80年代、90年代にそのうねりが大きくなるのを肌で感じてきました。日本社会では、1995年の阪神・淡路大震災に100万人とも言われるボランティアが駆けつけたのは、それまで蓄えられつつあった地下のマグマが噴出した現象と、私は見ました。それからは、市民活動を支える法律や支援税制が市民側の努力で整備され始めたのは、読者の皆さんもご存知の通りです。一方、私が仕事で訪問していたアジア各国でも外国の援助を受けた青年たちが70年代頃から立ち上がり、夢を語り、地域開発や農村開発等に参加し、新しい社会のあり方を求めて、自治体、政府、国際機関等への提言活動を積極的に繰り広げるようになってきました。

このような世界的な地殻変動が起きつつある中、本研究科は、世界の潮流を読み取り、新しい21世紀の社会のあり方をリードする役割があると考えます。そのためには、コースの充実など、さらなる努力が求められます。院生諸君に期待したいのは、社会の動きを常に自分の目で見て、体験し、状況や動向を分析する力を持って欲しいことです。そして問題意識をもち、新しい社会を描き、そのための知力を高めるのはもちろん、行動を起こして欲しいと願っています。ともに刺激し合い、本研究科の発展に努めたいと考えます。

プロフィール 71年 カリフォルニア大学(UCLA)行政学修士。73年より88年まで、(財)日本国際交流センター勤務。79年よりアジアコミュニティトラスト運営委員会事務局長、アジア各国のNGOの調査活動とネットワーク作りに従事。87年にNGO活動推進センター(現国際協力NGOセンター)を共同で創設し、常務理事・事務局長。現在、同センター理事。政府のODA総合戦略会議委員。アジア農地改革・農村開発NGO連合副理事長。シーズ副代表

危機管理

門奈ゼミ

「現代社会において特に最近の戦争、テロなど混沌とした世界情勢の中、メディアの果たす役割はきわめて大きいといえるでしょう。私達の研究室は現在2年生3人、1年生4人いますが、メディア、ジャーナリズムなどの中でも各々の興味分野は多岐にわたっています。

門奈教授の下で自由に、そして和気あいあいと研究に励んでいます。メディア・ウオッチやりたい方興味がありましたら気軽に声をかけてくださいね。」

NPO/NGO

中村ゼミ

私たち中村ゼミには数多くの院生が所属しており、1、2年生が各4つのグループに分かれ研究活動を実施しています。

- 1) NPO自体や運営方法、組織行動等に関することがらを探究するグループ
- 2) コミュニティやまちづくりなどに関することがらを探究するグループ
- 3) 教育・文化や人間に関することがらを探究するグループ
- 4) 社会とのつながり、ネットワークなどに関することがらを探究するグループ

以上について探究するグループがあり、また、基本的なことを学ぶためのゼミ NPO/NGO 市民社会・コミュニティデザインの社会学なども実施しています。1、2年生共に独自に考える場を設け、日ごろの疑問や質問をみんなと一緒に議論し、お互いを高め合うコミュニケーションを図っています。

NPO/NGO

伊勢崎ゼミ あくまでも現場主義

現場第一主義。理論も大切ですが、臨機応変な理論でなければ現場では意味がありません。そういう人たちの集まりですから、修論のために海外に出かけた行動派もいます。個性豊かなので連帯感はなくとも先生を中心にしたもの。アフガンの治安がもう少しよければ卒業旅行しても良かったのですが。

このゼミは在学中よりも、後の活躍のほうが楽しみなゼミかもしれません。「情熱大陸」派の先生には、不思議なオーラがあります。いつも笑ってごまかされるのですが、なぜかついて行ってしまふ。そこにはきつと嘘がないからかもしれません。

組織論

北山ゼミ

領域横断的な知のありかたを、日々は実践の北山ゼミです。私たちのゼミは、外から眺めると、各人が相互に関連のない主題を勝手にやっているように見えるかもしれませんが、北山先生の的確な交通整理と方向付けに助けられながら、議論を進めていくなかで、各々の主題における解釈枠組みや方法の共約性に気づかされるのが少なくありません。それは、折り返し、自らの主題の幅や奥行きを拓けることにつながります。学問の塔に立てこもるのではなく、知のバザールの喧騒を楽しんでみるのはいかがでしょうか。

危機管理

川村ゼミ

川村ゼミでは、公共組織を中心とした危機管理一般と防災についての研究などを行っています。川村教授は、ゼミ指導も非常に熱心で、修士論文のテーマ設定から調査、執筆の過程まで、個々人の相談に対して、きめ細かな指導をさせていただきます。また、ゼミ生との交流の中では教授の温かい人柄にも触れることができます。さらに、ゼミを構成するメンバーは、職種も経験も異なる個性豊かな人たちで、仕事経験から危機管理について高い問題意識をもち、意識を高め合いながら楽しく研究しています。

NPO/NGO

入山ゼミ

入山ゼミは、市民社会を自分の視点で研究したい方に是非お勧めです。

一年次には、授業と平行してゼミでも多様な文献を読み、市民社会を考えていく上での視点を学びます。また、発表やディベート、そして学生の発案による自主勉強会や合宿を行い、造詣を深めます。二年次には定期的な修士論文の発表会を行い、入山教授からの指導だけではなく、ゼミ生同士も活発に意見を述べ合います。

入山教授を中心にゼミ生同士の仲も良く各自の修論テーマも幅広いため、視野を広く持ちたい方、また論理的思考を鍛えたい方にもお勧めです。

組織論

笠原ゼミ

組織論とはいっても、それぞれのゼミ生がテーマにしていることは、多岐にわたります。しかし笠原先生は、その根本の部分を見つめ、なぜそうなったのかという視点へと導いてくださいます。知的好奇心を満たしたい方にはお勧めのゼミでしょう。実際のゼミでは、2年生の発表に対する鋭い指摘と明確な方向付けに思わず引き込まれてしまいます。先生のお話はいっしょに続きますが、いつの間にか外が暗くなっているという状態です。しかし緊張の高い時間ばかりではなく、ゼミ前後のなごやかな楽しさ、ユーモアのある会話も、ゼミの楽しみです。

組織論

菊野ゼミ

菊野ゼミは菊野先生を中心に実に様々なテーマに格闘するゼミ生が集まっています。企業倫理、経営理念、企業の社会的責任、中小企業問題等々、営利企業の持つ問題点、または福祉の分野、コミュニティの分野、実に多岐にわたっています。でも先生の教えの根っこの部分はゼミ生全員共有です。それはWHYの問題意識をつよく持つこと。難しく行き詰ってくると先生の“面白いです”というフォローの言葉が聞こえてきます。緊張感のなかに和やかな雰囲気のある菊野ゼミです。

院生研究あれやこれや

座談会

この研究科に期待すること



出席者

瓜生ふみ子(2年) 草水美由紀(2年)
太田圭子(1年) 神谷信治(2年)
木村 聡(1年)

司会 中村 陽一 教授

司会 中村陽一教授

司会 2年生の方は修士論文も出し終え研究科修了も目前ですが、学生生活を振り返り、また1年生の方は1年間のカリキュラムをとおして、感じていることや気づいた点など、ざっくばらんにお話いただければと思います。

はじめに自己紹介代わりに研究科で学びきっかけとなった問題意識や自己のテーマについて簡単にお話ください。

神谷 平成7年阪神淡路大震災において、NHK名古屋支局から現場へ参加した経験から、情報伝達の困難さと危機管理への問題意識を持ちました。その後自分なりに勉強を続け、危機管理が学べるこの研究科での学びにつながりました。修論は「災害時における情報伝達」をテーマにまとめ、将来的には博士論文として「地上デジタル放送の普及における情報行動の変化」をテーマに研究を進める予定です。

木村 3年間のポリビアでの仕事をとおして、国際援助の現場におけるコミュニティの現状や、貧困にかかわるなかで、行政的なセクターにとらわれない直接的なアプローチの方法を研究してみたいと入学し、学んでいます。

太田 地域計画やまちづくりの仕事に6年ほどかわり、市民や住民の参画に問題意識をもち、NPOの活動を手伝う中で、NPOのマネジメントの興味を持ち入学しました。まちづくりにおける計画と現実の関係性を研究してみたいと思っています。

草水 日本語教師や横浜市国際交流協会の仕事を通して、在留外国人と関わり、行政と市民活動のありや、研究と現場をつなぐ必要性を感じ入学しました。女性や子供や障害者の問題は外国人の問題とも大きく関わります。研究テーマとしては、社会的排除(Social Exclusion)を現場の活動と絡めながら考えていくつもりです。

瓜生 地域活動からNPO法人をつくり、ファミリーサポート事業を受託しています。活動に対する理論的裏付けの必要性を感じ、危機管理の分野への興味もあって入

学しました。修論テーマとしては、「まちづくりと地域セキュリティ」を、事業創出も考えながら研究しました。

学びの先に生まれるものが個人や社会に浸透していく

司会 ありがとうございます。この研究科は新卒の方もいらっしゃいますが、社会人の方が多いので、仕事や活動とのつながりや学びとの相互関係で、変化や明確になった事についてお気づきの点をお話ください。

神谷 さまざまなところで、組織としてのミッションの必要性を感じています。入学して、研究や理論構築のプロセスを通すことによって、発想や考え方が変化しましたし、物事を深く考えるスタンスも、研究を重ねることで生まれたように思います。

司会 この研究科はMBAを取得できますが、単にスキルの習得と言うよりは神谷さんのいわれるように、学びの先に生まれるものが個人や社会へ浸透していくのですね。木村さんはいかがですか？

木村 仕事は内部に深く向かいますが、研究科で学ぶことによって、視点の多様性、自己の専門性との関わり、自分と仕事の中で目指すものをクロスしていく方向が見え

てきている気がしています。

司会 多様性の中で生まれるネットワークの重要性はこの研究科の特徴でもあります。瓜生さんは活動との関連で何か生まれるものがありましたか？

瓜生 行政の財政改革審議会委員などの仕事をとおして学びを役立て、論理的な発言ができ、実践も行えたと思います。今後は、自分の組織の中でも役立てていき、さらに自信を持って市民の立場から発信していきたいと思っています。

司会 そうですね。市民の活動を広げる上でも、この研究科での学びはお薦めと言えるでしょうね(一同 笑い)。それでは草水さんはいかがでしょう？

草水 研究の場、活動の場を通して人に伝えることが大切であると感じていましたが、学びを通して、人々とのつながりや経験と議論の関係性を認識することができ、よかったです。

司会 今回はNPO学会での発表などもありましたし、様々な場で話を伝えることは大切ですよ。では太田さんはいかがですか？

太田 学びと実践が結びついている現在の環境で、今後、今の思いをアウトプットしていきたいと思っています。



瓜生ふみ子さん

NPO法人CCNET 代表理事、
町田市長期計画審議会委員
町田市福祉のまちづくり委員
まちだNPO法人連合会 会長など
〔修論〕

まちづくりと地域セキュリティ：乗物盗(オートバイ盗・自転車盗)から見た東京の犯罪状況とソーシャル・キャピタルに関する考察



木村 聡さん

独立行政法人国際協力機構勤務。衛生セクターに関する開発調査、災害緊急援助、国内への留学生受け入れなどを担当後、ポリビア事務所に勤務し、保健医療分野を担当。

〔研究課題〕

国際協力分野における各種アクター(国際機関、各国政府機関、NPO/NGO、民間企業等)の協働のありかたor連携モデルについて。

仕事と学びの調整や苦労は？

司会 さて研究科を目指している方たちへ現在学ばれている中で仕事との調整や苦労など、体験から伝えることがあればお話いただきたいのですがどなたかいかがですか？

草水 仕事を中断して学ぼうとするとき、海外で学ぶ選択肢もありますが、地域での活動を続けながら学びを役に立てることが、とても重要でした。

瓜生 私の場合は仕事の仲間のささえもあり、期待や励ましにこたえる気持ちも生まれたように思います。

司会 それはよいですね。職場の理解が得られにくい中で学んでいる方は、苦労しておられるときいていますので大いに力づけられます。話は変わりますが、21世紀社会デザインという新しいタイプの研究をされる中で、将来的の社会に対して、あるいは自分自身に対して、どのようにお考えをお話しいただけますでしょうか？

たとえば、卒業後への生かしかななどを紹介していただけると、今後、研究を目指す方の参考になると思いますのでお話をください。

草水 学びを通して、また様々な出会いを通して、物の見方は多様であることを知りました。研究を進め、理論的にも現実的にもより深く進めるために、さらに21世紀社会デザインを考えていきたいと感じています。また問題解決のため自らがNPOをつくることも検討していきたい、と思っています。

木村 周囲のNPOやNGOの活動について、研究科での学びをいかし、現場でより深いかわりをもちながら、アドボカシー活動ができればと考えて始めています。

瓜生 学校依存症になりそうで、卒業後が不安ですが、今後学びをどのようににつづけていくかについて検討しているところです。

司会 卒業後のネットワークや学びの継続に関しては受け皿を考えていきたいと思います。

博士課程を目指すされる神谷さんはいかがですか？



草水美由紀さん

都市銀行国際部門での主計業務、国際交流協会でのプログラムコーディネーターとしての勤務を経た後、大学院に入学。

〔修士論文テーマ〕

「神奈川の在住外国人生活課題の構造的理解に向けた『ソーシャル・エクスクルーージョン』概念の有効性とその理論的検討」－神奈川在住外国人の支援体制にみる取り組みの課題から－

神谷 時代も変わり、研究を続けることはめずらしいことでもなくなっています。ライフワークとして学びつづけ、論文などを通して社会へ疑問を発信していきたいと感じています。論文を作る過程は長い時間がかかります。研究科でも2年と言う短い中で、どのように論文へつなげていくかの道筋などを提供できるといいと感じました。

司会 大学院に求められることは社会的に変化しています。実践と研究の境目がなくなりつつある中で、指導の方法も変化しなければならぬ課題です。研究会や学会などオープンな場を作っていきたいし、卒業生が研究科のゲストスピーカーとなるなどフィードバックも目指したいと思います。

太田 様々な学問分野にとらわれない学びを、働きながら生かしていきたいと感じています。

新しいタイプの職能をもった人材を創出していく

司会 新しいタイプの職能をもった人材を創出していくことは大切だと考えており、今後のカリキュラムづくりもふくめて考えていくつもりです。最後になりましたが、この研究科に期待することについてをみなさんとポジティブにお話をしたいと思います。

瓜生 NPOに関しては立教と言われるような研究科になることを期待し、女性のエンパワーメント、自己実現ができることを支えていければと考えています。

神谷 授業のなかで、年齢や経験を超えてアクティブな議論ができることが望ましいです。多様な人材が存在する中でチャレンジ精神や意見が交流する『伝統』を作りたい。聴いているだけ、受身の講義では新たな発見は生まれません。

草水 博士課程の設置、21世紀社会デザイン学の確立を院生の中からも支えていくことが必要だと思います。他の研究科や他大学との連携や交流を進めていくことも大切です。新しい課題ゆえに学会などに積極的に参加、発表していくことも、意見を広くやり取りするよい機会だと思います。



神谷信治さん

NHK勤務。今後はジャーナリズム関連の博士課程への進学を目指している。

〔研究領域・問題意識〕

メディア・ジャーナリズム、情報化社会、メディアの危機管理等。

〔修士論文テーマ〕「災害時における放送メディアの情報伝達過程についての一考察」

- 阪神・淡路大震災の事例をとおして -

司会 確かに交流や情報交換は大いにしていくべきですね。インターンシップなども含めて参加を進めていきたいと思います。

木村 「21世紀社会デザイン学」の認識を深めていくこと、固定的なものになる必要はないですが、現在の黎明期の躍動感を持ちながら研究者として目指す人、社会に出て実践する人が生まれていく形が良いと思います。

これから研究科で学ぶ方へのアドバイス

司会 とても参考になるお話をいただきました。研究科としてのシステムを作る一方で、中範囲の理論として具体的な理論構築を目指すことを必要としています。皆さんのお力も借りて創り上げていきたいですね。

太田 大学のあり方も、多様でフレキシブルであってほしいと思います。卒業生のかかわりも含めて、面白い研究科を目指したいです。

司会 最後に、新たにこの研究科で学ばれる方へのアドバイスとして一言を各自お願いします。

瓜生 研究科へのお願いとして公開講座等やeランニングを使ったり、さまざまな可能な形で学べるようにしてほしい。後輩へのアドバイスとしては、時間の使い方をうまくすること、自分の学びの時間認識を生活に位置づけることです。

草水 短い2年間を思い切り欲張っていることをしてほしい。

太田 同級生としていろいろな人、多層な世代との仲間作りを楽しんでほしい。

木村 専門性というより、いろいろな機会を経て、視野を広げるきっかけを得ること。

神谷 目標設定を自分にたて達成する、自分自身がオンリーワンであることが重要です。たとえば300冊本を読む努力などです。

司会 意見を交換する場が、いろいろな形でまた多くもてることができればと考えています。今日はお忙しいところありがとうございました。



太田圭子さん

都市計画や地域づくりのプランナー、コンサルタントとして勤務しながら研究科に入学。現在は財団法人のシンクタンクと中間支援型のNPOという、2つの非営利組織でアルバイトをしながら学校に通っている。

〔研究課題〕都市計画や社会政策、住民参加等に関する国・地方自治体の政策と、それらに影響を与えている理論や先進的な取り組みとの関係を整理したい。

印象に残った 授業& 出来事

1 内山先生と山里の暮らし

高校生の国語の教科書や大学試験問題に登場する内山先生の文章は、難しいと感じるテーマについて実にわかりやすい説明をされているのをお読みになった方も多いと思います。特殊研究 臨床自然学と言う名前からは、少し想像を超える授業ですが、21世紀社会デザイン研究科の授業の中でも印象的であり、課題図書としての「時間についての12章」(岩波書店)は、多様な読み方が可能な本であると、とてもおすすめです。

たとえば、直線的な時間は、使い捨ての有限的な時間認識であり、その中で常に時間や効率におわれている暮らしが存在するのですが、一方で循環する時間は森をはぐくみ、村の暮らしや労働が永続的に続いていく多層的な時間世界を作り出すのです。時間の積み重ねについて巨木のたたずまいから学ぶことができた体験(夏の上野村スタディツアー)はとても貴重であると思います。

自然がもたらす安らぎや、山里の暮らしに、なぜ魅力を感じ、憧れを抱く人が増えているのかを考えると、人間にとって大切なものを失いつつある現代文明に対しての疑問が生まれるのだと思います。

先生のテーマである労働と人間と自然を巡る哲学の中で、時間についての概念は、現代社会に生きる私たちに、生き方を問うようなインパクトをもたらし、先生がすんでいる群馬県上野村での学びは、山里の豊かさを改めて認識することになりました。

(報告: 齋藤啓子)



冬には毎年恒例の餅搗きが内山先生宅で行われます。21Cの院生達だけではなく、森林フォーラムの方々などさまざまなところから人々が集まって、お餅をつきました。



北山 晴一 教授

みなさん、お元気ですか。

あいかわらずカナダのモントリオールからです。ご承知かもしれませんが、こちらは非常に寒い。先日、イラク戦争反対デモのあった土曜日など、マイナス25度。それでも、20万人の市民がデモに参加しました。

カナダ、とくにわたしに住んでいるケベック州(旧フレンチカナダ)は、社会組織や社会デザインの観点からみると非常に面白いところだということが、ようやく実感としてわかってきました。

カナダはバイリンガルの国だとよくいわれますが、これはかなり眉唾で、英語圏のひとはフランス語がほとんど話せません。いっぽうカナダのことを少しだけ知っている人の口から聞かれるのが、以下のような言い分です。いわく、ケベック州はフランス語にしがみついている時代遅れの地域、しがみつくだけでなく、英語圏の人にも、ましてや先住民の人にも、国語としてフランス語を強制するなどとは、いかがなものか、英語の絶対的な力はデファクトスタンダードの問題なのだから、いくらフランス語への執着など無駄な努力ではないか。

こんなおおざっぱな議論は、英語大国主義にあぐらをかいた議論の典型ですが、じつはフランス語がいまの地位を回復したのはやっとここ40年ほどのことにすぎない事実を無視した議論に他なりません。すぐ南に2億5,000万の巨大な人口を誇示する英語大国USAを控えるケベック州のフランス語系住民にとってはフランス語は彼らマイノリティ住民の最後のよりどころといった状況です。

ケベック州、なかでもモントリオール市では、何事につ

モントリオールだより



け議論が盛んで、グローバリゼーション(ここでは全アメリカ大陸自由貿易圏のかたちで先鋭化している)米国との関係、ケベック州と他の英語圏州との差異、あるいは軋轢、文化的あるいは政治的経済的な力関係と多言語状況の絡み合い、マイノリティと民主主義の関係、これらの問題をジェンダーの観点から見直せばどうなるか、といったかたちで活発な議論がなされています。とくに女性の発言権が強いですね。(2003年9月、1年間の研究休暇を終えてモントリオールから帰国しました。上記はその滞在報告です。次回から、具体的な話に入っていく予定です)

(21世紀社会デザイン研究科)

2 評価インターンプロジェクトに参加して

「コミュニティデザイン学演習」で、前期・後期にわたり「評価」の講義を専攻した私たち4名の学生は、2003年9月、島根県川本町で行政評価インターンを体験しました。日本評価学会と21世紀社会デザイン研究科によるパイロットプロジェクトの一環で、企画立案者は、当研究科の入山映教授と広島大学の長尾眞文教授。

4名はそれぞれ、総合・福祉・文化・観光という4つの得意分野に分かれて行政評価を担当したのですが、風光明媚な土地にしながら観光どころではなく、調査期間の一週間は、役場の一室で、文字通り朝から晩まで資料に追われる毎日となりました。

実際に評価作業を始めてみますと、机上の学問と実践とは大

違い。何をどう評価すれば良いのか、初歩の初歩から試行錯誤の連続でしたが、講義を担当されていた講師の竹内正興先生、寺田幸弘先生のお力添えもあり、10月には川本町役場において評価報告会を実施、11月の日本評価学会・大分大会では、プロジェクトの成果を発表するにまで至りました。これがきっかけとなって、東京都内の某市役所から学生インターン受け入れの申込みがあった時には、私たちの苦勞が報われる思いがしたものです。山盛りの「モズク蟹」に歓待された川本町での交流会など、辛さ半分楽しさ半分の素晴らしい思い出となりました。

「評価」は21世紀社会デザイン研究科ならではの講義です。今後、行政においてはますます評価の重要性が問われてくることでしょう。来年度からは評価研修が単位として認められることになるようです。後輩の方たちがこうした授業を大いに活用し、実践家としての実力をつけ、社会の中で活躍されていくことを心から期待しています。(報告：森田朋子)

3 石川先生の授業と車椅子体験

石川先生の授業は創造的でパワフルなエンパワーメントする授業です。石川先生の授業の学生の声を集めると。

「単に知識を仕入れるだけでなく、自分たちがアクションを起こし、提案し、社会を変えていくということの大切さを学ぶことができました。各授業は、どうしても自分の頭の中で考える段階までしか到達しないのですが、この授業では、『社会のデザイン』という『アウトプット』を試みる貴重な体験ができました」(太田圭子)

「太っ腹で情熱的な石川先生と、フットワーク軽快な仲間たちと共に自分の手で情熱をカタチにするヒントの宝庫です」(鈴木桂子)

「車椅子の体験を通して、身体で感じることで、違った視点から物事を見る大切さを知りました。また、そこで感じた社会問題の解決法を探りながら、企画を具体化していくプロセスが学

べました」(横井秀治)

「ポジティブに知識と行動、そしてアルコールのバランスを重視する石川さんの授業は、市民活動の『自分が生まれ変わっていく』楽しさを体験できます」(富永さとる)

「石川ゼミの特徴は『実践』」(渡辺啓嗣)

「あたまでっかちになりがちな、私の頭のマッサージをしてくれたのが、このゼミだったのではないかと思います。例えば、車椅子に乗って池袋を感じる。車椅子を押し、乗る人を思いやる。この経験を胸に次の階に昇ります」(佐藤万里江)

では、最後に先生のコメントをプレゼント。

「身体で知ること。身体で覚えること。身体で感じること。身体でイヤがること。身体で何かを好きになること。身体で将来を見据えること。身体が幸せになること。ああ一杯ある。どうぞ身体を大切に短い人生を過ごしてください。」(石川はるえ)

(報告：小林勢子)

4 栗原彬先生「共生のネットワーク」

日本の学問の主流は、脱亜入欧路線のもと「国家の知識人」としての大学人が、富国強兵に役立つ研究と人材育成を行うものでした。水俣病について東京大学が国策企業チッソは関係ないと調査発表したことはその象徴です。グローバリズムと生命政治の吹き荒れるなか、外部、社会的弱者と自然を犠牲にした経済発展による国家官僚機構のヘゲモニーはゆらぎ、新しい共同性を立ち上げる構えと場が求められています。

そんな中、日本社会が新しい公共性として選んだ、市民活動のためのNPO制度。しかし、ボランティアの原点たる「共感」から義憤や正義感だけは巧妙に排除されつつあります。孤立を恐れ連帯を求めない天皇制文化のもと、強者の無責任を容認する奴隷 - 主人の馴れ合いでしかない「対立ではない行政との協働」が、最も矛盾をしわ寄せされる被差別者、排除される者 - 受苦者を置き去りにしようとしています。環境保護も人間への支配管理と同伴する危険性をはらんでいます。かつて労働運動が「八紘一宇のよき社会」の翼賛運動へと回収されたように、NPOもまた国家のヘゲモニー装置に転換しつつあり、日

本社会の地殻変動がもたらした市民革命的側面は受動的革命へと転化しようとしています。

生活知と専門知の交差から市民的専門知を編み出すという我が研究科創設の理念を実現する出発点を、受苦者の声に応えようとするresponsibilityに求め、経済的私益ではない親密圏から直接に公共性-公共圏-公的決定 = 市民政治を立ち上げることを構想し、市民自身が市民を差別排除していく構造と共犯的な人権 - 近代国民・国家を越える新しい人権概念を模索する先生の授業は、人間と人間、人間と自然の共生の原点を忘れた効率優先の経済主義と一線を画する我が研究科の誓であり、市民社会が大学に確保した橋頭堡です。(報告：富永さとる)



知の体系化と 学会設立

21世紀 社会デザイン研究科
教授 笠原清志



立教大学21世紀社会デザイン研究科は、2002年4月に危機管理と非営利組織のマネジメントが学べる、日本で初めての大学院としてスタートしました。

従来の研究者養成の大学院とは異なり、社会人対応の独立大学院としてスタートしたこともあり、数多くの方々を専任、特任教授そして講師としてお迎えしました。大学の研究者だけでなく社会的に活躍なさっているの方々をお迎えしたことにより、立教大学の知の枠組みがさらに大きく、そして充実したと思っています。また、それぞれの分野で活躍する社会人の人達の入学は、当研究科の設立の趣旨でもありました。大学を中心とした知と組織のネットワークの可能性を改めて我々に認識させてくれたように思っております。

危機管理やNGO、NPOの分野を組織ネットワークという視点から考えるということは、アカデミズムの世界でもスタートしたばかりのことです。そして、これらの分野の研究の重要性は以前から指摘されているにもかかわらず、膨大な暗黙知や経験知が十分に体系化されることもなく存在しております。

当研究科では、今後は、授業や研究の内容を体系化し、教科書や研究叢書として刊行していく必要があると思っています。

以上のプロセスを補完し加速するという意味で、21世紀社会デザイン研究学会の設立を今年の秋までには準備していきたいと思っています。これは当研究科の院生たちが卒業後も知を通じて大学との関係を持するためにも重要です。しかし、それ以上に危機管理やNGO、NPOの世界では、知の体系化が遅れているように思います。学会活動を通じて多様な知が統合され、立教大学以外の多くの研究者と実務家も参加する知のネットワークが形成できたらと思います。



自主グループ hug-kumi

社会的弱者の視点に立ち、当事者性をもって育みあおうという自主グループ。

昨年度は、ジェンダーフォーラムと研究科の初共催の講座企画に関わらせていただきました。多様な現場から実践者を招いて学習会を開催したり、カウンセラーや鍼灸師等のメンバーによる学びあいプログラムの実施や、家族のケアを担いながら大学で学べる体制作りを考えていきたいと思っています。様々な思いを共有し、課題を解決する道をとともにみつける仲間、募集中！

連絡先 代表：伊東 kyon@dk9.so-net.ne.jp

～ 21世紀のよき社会の実現を目指す～

特定非営利活動法人

21世紀社会デザインセンター

<http://21csdc.intranets.co.jp/>

人権意識に裏付けられた共生的な社会の実現を目指し、本研究科院生有志により設立された中間支援型NPOです。私達は社会を良くしたいと思う個人や団体の活動に対し、研究科をベースとしたネットワークにより共同知を常に刷新しながら、活動アドバイスや組織マネジメント等総合的な支援を行います。目指すは日本版タイズセンター (<http://www.tidescenter.org/>) 支援事業を内部プロジェクト化し、小さな活動も信頼性を高め、継続できるよう努めます。

会員募集中 問合せは rikkyo21sdc@hotmail.com

Schedule!

今後の研究科予定

21世紀社会デザイン研究科主催 講演会/シンポジウム(2003年度) 21世紀社会デザイン研究科2004年度(前期)学年暦

日付	曜日	講演会/シンポジウム
6月14日	土	講演会：浜辺哲也氏「公益法人制度改革とNPO法人の行方」
7月12日	土	講演会：山岸秀雄氏「日本のNPOの現状と課題」
10月4日	土	講演会：村尾信尚氏「日本は変わる。あなたがもし望むなら」
10月11日	土	世界情報社会サミット・アジアNGO会議
13日	月	シンポジウム「市民社会とインターネット・ネットワークの20年と未来への飛躍」
11月22日	土	21世紀コープ研寄付講座：21世紀社会デザインとソーシャル・ビジネス～市民起業入門～第1回(中村陽一氏)「ソーシャル・ビジネス、コミュニティ・ビジネスの可能性について」
29日	土	寄付講座第2回「教育テーマ」日野公三氏(株式会社アットマーク・ラーニング社長)
12月6日	土	寄付講座第3回「環境テーマ」植田紘栄志氏(株式会社ミチ・コーポレーション代表取締役)
13日	土	寄付講座第4回「まちづくりテーマ」木下斉氏(株式会社商店街ネットワーク取締役社長)
		シンポジウム「21世紀に生きる 国連ミレニアム開発目標と日本の若者ができること」
20日	土	寄付講座第5回「シニアテーマ」石川治江氏(社会福祉法人にんじんの会理事/NPO法人ケアやわらぎ理事)
1月10日	土	寄付講座第6回「事業企画発表およびコメントによる評価」

年月日	曜日	行事
2004年4月3日	土	研究科ガイダンス(1年次)
2004年4月6日	火	入学式
4月7日	水	ガイダンス(2年次)
4月8日	木	履修相談(1年次)
4月12日	月	前期授業開始
4月16日～20日		履修届受付期間
4月24日	土	登録科目確認表郵送
4月27、28、30日		履修登録変更届受付期間
5月5日	水	創立記念日
5月26日	水	体育祭(全日休講)
7月14日	水	前期授業終了
7月15日	木	独立研究科集中講義始まる
7月30日	金	夏季休業開始
9月20日	月	夏季休業終了